

がん検診啓発活動を通しての看護学生の学び

平野 文子・小村 智子・小池由季子
狩野 鈴子・山下 一也

概 要

がん医療の向上に向けて、地域でがんの検診啓発活動に取り組む看護学生の自主グループが誕生し、正課外活動として取り組んでいる。地域の健康課題「がん」に関する、啓発活動に取り組む看護学生の学びをインタビューから質的に分析し、明らかにした。

学生は〈関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性〉〈専門職者を目指した自己研鑽〉〈コミュニケーション能力の向上〉〈問題発見・解決と企画力の向上〉〈倫理観・責任感を伴った行動の必要性〉〈社会性形成と自己理解〉の6カテゴリー、30サブカテゴリーについて学んでいた。授業時間以外の自主的な学習を促進する正課外活動の重要性が示唆された。

キーワード：がん検診啓発活動，正課外活動，看護学生

I. はじめに

平成18年6月にがん対策基本法が制定され、人口10万人当たりのがん死亡率が6年続けて全国2番目に高い鳥根県では、がん対策の総合的な推進が図られている。鳥根県がん対策推進計画（平成20年3月策定）においては、重点施策として「がん検診受診者数の増加をはじめとするがん予防の推進」が、そして、重点目標として「がん検診受診者数の増加」が掲げられている（鳥根県，2008）。これは、鳥根県での市町村が実施するがん検診（以下、検診）受診率が全国と比較して低率となっており、平成19年度では乳がん検診が第47位と最下位を記しているなどの実情があるためである（厚生労働省，2009）。

がん医療の水準向上と均てん化を目指した中で、前述した鳥根県における地域の健康課題に着目し、がんの検診啓発活動に取り組む看護学生の自主グループが平成21年に誕生した（平

野，2011）。具体的な活動としては、地域のコミュニティセンターや文化センター、大学祭等で自分たちが学んだがんに関する知識を活かしながら、がんの予防や検診啓発を呼びかける活動である。正課外活動として、学生による自主的な企画・運営が行われている。その取り組みは、がんの罹患率の高い壮年期だけでなく、子育て世代や学生と同じような若い世代への啓発に意味があると注目されてきている。

近年、我が国の大学教育において、地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」や「学士力」が提唱されている（経済産業省，2006；文部科学省，2008）。また、「専門性を発揮して世の中に役立つようになるため」の教養を「人間力」と呼び（友野，2010）、これらの能力育成には、正課外活動が非常に有効であるとしている（溝上，2009；中森，2010；山田，2010）。

本学の学生たちは、医療に関する基礎知識と看護学を学び、その専門性を活かしながらこれらの正課外活動を通して何を学んでいるのか、自主的・主体的な取り組みとなっているのはな

ぜか、学生の学びを明らかにしていきたいと考えた。本研究を行うことで、正課外活動による学習効果と支援のあり方に関わる基礎資料となり、教育資源として寄与できると考えた。

Ⅱ. 研究目的

地域の健康課題「がん」に関する、検診啓発活動に取り組む看護学生の学びと、これらの自主的な取り組みに影響を与えた要因を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 用語の定義

がん啓発とは、がん（癌）について気づかずにいるところを教え示し、より高い認識・理解に導くこと。または、がん予防・検診の必要性と重要性を理解してもらう活動のことをいう。

2. 研究方法

1) 対象

学生による自主グループ「がんを考える学生の会」に所属し、がん啓発活動の企画・実施に関わったことがあり、本研究に同意の得られた看護学生12名。

2) データ収集期間

平成24年2月～平成24年3月

3) データ収集方法

対象1名に対し、面接者1名ずつ計3名の研究者で看護学生12名のインタビューを約35～70分間実施した。インタビューは、活動を通しての体験や学びに焦点を当て、対象者の会話の流れや想起された内容を尊重しながら自由に柔軟に話すことができるよう、半構成的面接法とした（インタビューガイド参照）。できるだけ話しやすい環境とするために、静かな個室を準備し、内容は同意を得て録音した。

〈インタビューガイド〉

*グループの設立またはグループに参加しようと考えた要因について

- *グループの活動を通しての学びについて
- *グループの活動を通しての自己の変化について
- *グループの活動や学び・自己の変化、自主的な取り組みに影響を与えたものについて

4) 分析方法

内容分析。インタビューの記述内容を1文脈単位で、検診啓発活動を通しての学びやそれらに影響を与えたと思われる要因を示した部分を抽出した。研究者4名で学びに関する記述部分の意味内容を解釈しコード化した。さらに複数のコードを整理・統合し、カテゴリー化した。

自主的な検診啓発活動の取り組みに影響を与えたと思われる要因に関する記述にも注目し、研究者間で抽出した。

5) 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、大学の研究倫理審査委員会による承認を得た。対象となる看護学生には、教員が本研究の目的と方法、自由意思に基づく調査であること、結果の公表においても匿名性を確保することなどを文書と口頭で説明した。

Ⅳ. 看護学生によるがん検診啓発活動の概要

1. 看護学生によるがん検診啓発自主グループ誕生の経緯

発端は平成21年、看護系大学の1年次生が、授業で「島根県はがん対策が進んでいる一方、で検診受診率が全国平均よりも低く、死亡率が高いこと」と学んだことであった。特に市町村が行う視触診を併用した乳がん検診受診率は、平成18年・19年は全国最下位（厚生労働省、2009）であった。また、がん患者・家族らが集い情報交換を行うがんサロンを授業で訪問し、「病気になってから検診の重要性が分かった。だからこそ、みんなに検診を受けてほしい」というがん患者の声を聞いた。そして、「もっとがんや検診のことを知ってもらえないか」、「学生の立場で何かできることはないか」と考え、

5名の有志による自主グループが設立された。対象を働く子育て世代で検診に行きにくい母親とし、乳がんのセルフチェックや検診の大切さを地域に出かけて伝えていった。平成23年度からは、この活動を母体として肺がんや20～30歳代で増えている子宮頸がんに広げて活動を行っている。

2. ねらい

- 1) がんは「怖い病気」「治らない病気」というイメージを持つ人が多いが、検診に行くことで早期発見でき、治癒や予防できることを周知する。
そのためにはがん検診に行く、という姿勢が求められることを認識してもらい、できるだけ検診に行こうと思ってもらえるように働きかける。
- 2) 子宮頸がんは若い世代（20～30歳）から発症するがんであること、性行為を経験した女性は誰でも罹患する可能性があること、検診やワクチンで予防・早期発見できることを同世代の若者へ発信し、自分のこととしての理解を促す。
- 3) 乳がんは唯一自分で発見できるがんであり、早期発見がその後の治療経過を大きく左右するというを理解してもらう。
- 4) 喫煙による身体への影響、喫煙とがんの関係性などについて啓蒙することにより、喫煙の怖さを理解してもらい、禁煙に繋がるような啓発を行う。

3. 活動内容

がんに関する学習を学生同士で行いながら、以下の活動を行う。

- 1) 子宮頸がん、乳がん、喫煙、がんを防ぐ12カ条のちらしを作成し啓発時に配布する。
- 2) 乳がん、子宮頸がん、喫煙に関するYES/NOボードアンケートに参加してもらい、乳がん・子宮頸がん・喫煙の害について質問・説明をする。それらを通して、がんに関する正しい知識を持ち、検診の大切さを感じてもらう。
- 3) ボードアンケートの説明等を聞いて感じた

ことや決意をメッセージボードに書いてもらう。理解が得られれば、メッセージボードと共に写真を撮り、フォトパネルを作成する。

- 4) フォトパネルを模造紙に貼り、次回の啓発に掲示する。
- 5) 乳房モデルを使用した触診方法について指導し、検診へとつながるように意識づけを行う。
- 6) 島根県がん啓発サポーターに登録し、がんを体験されたサポーターと共に説得力のある啓発活動を行う。
- 7) 関係機関（島根県対がん協会、島根県健康推進課がん対策推進室、島根県環境保健公社、島根大学保健管理センター、細胞検査士会島根県支部、地域連携ステーション、県内のがんサロン等）の協力を得ながら、島根大学や島根県立大学短期大学部松江キャンパスのサークルメンバーと子宮頸がんや乳がんについての学習会を行う。そして、同世代等へ検診の必要性について発信する。
- 8) 「がん検診」に対する意識について参加者と意見交換を行う。

4. 実際に行ったがんの啓発活動

実際に行った活動内容の主なものを表1と写真1～5に示す。



写真1 コミュニティセンターでの乳がん啓発



写真2 島根県がんキャンペーンでの出前講座



写真3 大社ご縁祭：ステージでのクイズ



写真4 学園祭での活動ブース




写真5 がんに関するボードアンケート

表1 がん検診啓発の主な活動内容

| 日時 | イベント名・場所 | 実施内容 | 参加者 | 参加 学生数 | アドバ イザー |
|-------------------------------|---|---|-------------------------|-----------|------------------------|
| 2009.8.8 18:00～ 21:00 | 「パパ、ママがん検診に行こう」 出雲市内喫茶店内 | がんの病態、乳がん検診の啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 映画鑑賞&軽食 | 母親6名 乳幼児4名 | 5名 | 1名 |
| 2009.12.22 18:30～ 21:00 | 「パパ、ママがん検診に行こう」 サンピーノ出雲 | がんの病態、乳がん検診の啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 意見交換「どうしたら検診に行けるのか」 | 母親6名 乳幼児4名 | 5名 | 1名 託児学生ボラ ンティア4名 |
| 2010. 7. 5 9:30～ 11:00 | 「パパ、ママがん検診に行こう」 出雲市今市健康文化センター | 乳がん、たばこの啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 | 母親6名 乳幼児4名 | 9名 | 2名 |
| 2010.9.11 10:00～ 11:30 | 「パパ、ママがん検診に行こう」 出雲市一の谷保育園 健康祭りに企画参加 | 乳がん、たばこの啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 | 母親・父親19名 乳幼児17名 | 5名 | 1名 |
| 2010.9.15 10:00～ 11:30 | 「パパ、ママがん検診に行こう」 出雲市大社町荒木コミュニティセンター | 乳がん、たばこの啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 | 母親18名 乳幼児18名 報道3名 | 6名 | 4名 |
| 2010.10.16 ～10.17 | 大学祭：つわぶき祭 島根県立大学短期大 学部出雲キャンパス | がん啓発サポーターと乳がん、たばこの 啓発活動 乳房モデルを用いた自己チェック法 看護学科3年次生による看護特論(がん 検診)の学習発表と同時開催 | つわぶき祭に 参加した学生、 市民 | 9名 | 3名 がん啓発サポ ーター6名 |

がん検診啓発活動を通しての看護学生の学び

| | | | | | |
|------------------------------|---|--|---|-----|---------------------|
| 2011.2.20 10:00～ 11:30 | 島根がん対策キャンペーン「知ろう、語ろうがんのこと」 in 出雲 島根県立中央病院 | 基調講演：日本対がん協会会長垣添忠生先生 出前講座「がん検診に行こう！」 | 250名 | 11名 | 3名 |
| 2011.4.9 10:00～ 16:00 | 「LOVE 子宮フォーラム」 島根県立大学松江キャンパス | 基調講演：島根県立中央病院岩成治先生 シンポジウム参加 東京女子大生「リボンムーブメント(RM)」との交流 | 160名 | 8名 | 3名 |
| 2011.5.8 10:00～ 12:00 | 啓発活動 松江サティ | がん啓発サポーターと共にがん啓発のちらし配布 | 対象：30代～50代の買い物客 | 7名 | がん啓発サポーター、保健師 |
| 2011.4～6 | 籠作り（がんサロン訪問時のおみやげ） | 牛乳パックを使用した籠を作成しがんサロンへ配布（ちょっと寄ってみませんか家、益田がんケアサロン、がんサロン大田、邑南がんサロンなど） |  | 8名 | 1名 |
| 2011.7 | がんサロン支援塾開催（益田がんケアサロン主催）しおり作成 | 全国からの参加者配布用「しおり」作成 | 90名分 | 31名 | 1名 |
| 2011.7.27 17:10～ 17:45 | 活動紹介 本学 101 講義室 | 本学専攻科助産学専攻の学生に、サークル活動紹介 (子宮頸がんの予防活動に協力依頼) | 助産学生 18名 助産教員 4名 | 5名 | 2名 |
| 2011.8.15 12:30～ 22:00 | 「大社ご縁祭」 出雲大社勢溜まり・神門通り・交通広場 | ブース、ステージ、会場内での乳がん、子宮頸がん、禁煙の啓発 がんに関するクイズ 会場内でのボランティア活動 (危険防止活動、ゴミ拾いなど) | 対象：高校生～祭参加者 ボードアンケート協力 303名 (延べ名数) | 21名 | 2名 |
| 2011.8.22 17:00～ 19:00 | 子宮頸がん予防のための啓発キャンペーン 「女性の健康学習会」 (出雲会場) 本学 104 講義室 | 子宮頸がん予防のための啓発キャンペーンについて 「若い女性に多い子宮頸がんについて知ろう」 講師：島根大学保健管理センター 河野先生 講師：島根県細胞検査士会島根県支部 小海先生 | 島大医学部 1名 報道 1名 企業 1名 | 10名 | 6名 |
| 2011.9.13 ～9.15 | 子宮頸がん予防のための啓発キャンペーン 1. 県内女子大生と子宮頸がんに関する啓発活動実践者の交流 in 東京九段ベルサール 2. リボンムーブメント(RM)との交流 国立オリンピック記念青少年センター、オフィス | 1. 各立場からの活動内容発表（患者、細胞技士、企業）とディスカッション 2. RMの活動報告 RMの概要、出前講座の方法、出前講座の実際、RMの活動についてグループワーク 「どうしたらみんなが検診に行きたいと思うか」 RMのオフィス見学と意見交換 | 日本対がん協会 2名、子宮頸がんを考える市民の会 2名、企業 1名、女性医療ネットワーク 1名、島根大学 4名、島根県立大学松江キャンパス 2名 PM 5名、女性医療ネットワーク 1名 | 18名 | 3名 |
| 2011.9.18 9:00～ 12:00 | がん啓発 ゆめタウン出雲 | がん啓発サポーターと啓発活動 ちらし配り | 買い物客 | 4名 | 2名 がん啓発サポーター、保健師 |

| | | | | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|--|---------------------------------------|-----|-------------------|
| 2011.10.8 10:00～ 15:00 | 島根大学 大学祭 島根大学松江キャンパス内 | 乳がん, 子宮頸がん, 肺がんの啓発 | 大学祭に参加した学生, ボードアンケート協力者 65名 | 16名 | |
| 2011.10.9 10:00～ 15:00 | 国立松江工業高等専門学校 学園祭 松江高専内 | 乳がん, 子宮頸がん, 肺がんの啓発 | 学園祭に参加した学生 129名 | 10名 | |
| 2011.10.15 ～10.16 | 大学祭: つわぶき祭 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス | がん啓発サポーターと乳がん, 子宮頸がん, たばこの啓発活動, 乳房モデルを用いた自己チェック がん予防クッキー販売 | つわぶき祭に参加した学生, 市民 | 22名 | 2名 がん啓発サポーター3名 |
| 2011.11.10 18:00～ 19:00 | おとめ在り月での啓発に向けて意見交換会 本学 213 講義室 | 「おとめ在り月」ブースでの啓発内容についての検討・意見交換 | | 10名 | 2名 |
| 2011.11.19 10:00～ 17:30 | 「おとめ在り月」イベントでの啓発 松江イングリッシュガーデン | 島根県のブースにて乳がん, 子宮頸がんとたばこの関係性について啓発 がんに関するクイズ 乳房モデルを用いた自己チェック ちらし配り | 主催者発表: 参加者 5,500名 ボードアンケート協力者 393名 | 9名 | 4名 |
| 2011.11.26 | まちサポ出雲での啓発 出雲体育館 | 啓発サポーターと乳がん, 子宮頸がん, たばこの啓発 乳房モデルを用いた自己チェック ちらし配り | まちサポ出雲に参加した市民 58名 | 8名 | 1名 がん啓発サポーター5名 |

Ⅳ. 結 果

正課外活動としてがん検診啓発活動を体験した学生は、次のような学びをしていた(表2)。**【関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性】** **【専門職者を目指した自己研鑽】** **【コミュニケーション能力の向上】** **【問題発見・解決と企画力の向上】** **【倫理観・責任感を伴った行動の必要性】** **【社会性形成と自己理解】**の学びを認め、それは6カテゴリー、30サブカテゴリーに分類できた(表2)(カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉で表す)。

大学のキャンパスから一歩地域に出て、様々な世代の人々と関係を図りながら活動することで**【関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性】**では、〈人と人との出会いを大切にする〉〈出会いを大切に繋げ、継続していく〉〈地域・社会との繋がりを意識する〉ことを実感し、一人では何もできないが、〈メンバーシップ・チームワークが必要なこと〉を学んでいた。

また、専門職としては学習途上であることから**【専門職者を目指した自己研鑽】**として、〈基礎的な知識と最新の情報収集が必要であるこ

と〉〈病態・予防に関する深い理解と継続した学習の必要性〉を、また、がんの啓発サポーターのほとんどががん患者であることから〈がん患者の経験に学び、その経験知を活かすこと〉〈自らも検診を受けて説得力のある説明・指導ができること〉を学んでいた。

【コミュニケーション能力の向上】では、〈相手のレディネスに応じた説明が大切であることとその難しさ〉〈相手の価値観を尊重した説明も大切であること〉などの伝える力についてや、〈非言語的コミュニケーションを活用すること〉〈相手の話を聴き、思いを引き出すことが重要であること〉等、最も多くのサブカテゴリーを認めた。

さらに、自分たちで企画する自主的な活動であるため、〈自分も含めた地域の健康課題に注目するようになった〉〈疑問を投げ出さず、最後まで追求する力がついた〉や〈他者の力を上手く借りて、解決する方法があることを知った〉等の**【問題発見・解決と企画力の向上】**や、〈大学の代表として活動していることの自覚〉〈看護学生として活動していることの自覚〉〈一人一人の体験・個人情報を守秘することの大切さ〉等の**【倫理観・責任感を伴った行動の必要性】**、〈エチケットやマナーの必要性と習得〉等の**【社**

表2 がんの啓発活動を通しての看護学生の学び

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-------------------------|---|
| 関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性 | <ul style="list-style-type: none"> ・人と人との出会いを大切にする ・出会いを大切に繋げ、継続していく ・地域・社会との繋がりを意識する ・人・物・時間の繋がりを活かすこと ・メンバーシップ・チームワークが必要なこと |
| 専門職者を目指した自己研鑽(知識・技術の充実) | <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な知識と最新の情報収集が必要であること ・病態・予防に関する深い理解と継続した学習の必要性 ・がん患者の経験に学び、その経験知を活かすこと ・自らも検診を受けて説得力のある説明・指導ができること ・健康管理・日常生活習慣の振り返りの重要性を実感 |
| コミュニケーション能力の向上 | <ul style="list-style-type: none"> ・相手のレディネスに応じた説明が大切であることとその難しさ ・相手の価値観を尊重した説明も大切であること ・十分に納得・理解してもらえる説明が必要なこと ・がん体験者に配慮した表現の工夫をすること ・感性に訴える言葉を選んで説明すること ・非言語的コミュニケーションを活用すること ・相手の話を聴き、思いを引き出すことが重要であること |
| 問題発見・解決と企画力の向上 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分も含めた地域の健康課題に注目するようになったこと ・疑問を投げ出さず、最後まで追求する力がついたこと ・他者の力を上手く借りて、解決する方法があることを知ったこと ・受身の姿勢から、前向きに考え、工夫して取り組むようになったこと |
| 倫理観・責任感を伴った行動の必要性 | <ul style="list-style-type: none"> ・大学の代表として活動していることの自覚 ・看護学生として活動していることの自覚 ・一人一人の体験・個人情報を守秘することの大切さ ・疑問を曖昧にしないで、専門的な支援を求めることの重要性 ・自分たちで決め、最後まで責任をもって遂行すること |
| 社会性形成と自己理解 | <ul style="list-style-type: none"> ・エチケットやマナーの必要性和習得 ・ほうれんそう(報告・連絡・相談)が大切であることを実感 ・互いの長所・短所を知らながら補完しあうこと ・みんなで協力すれば、できるという達成感 |

表3 看護学生の学びに影響を与えている要因

| | |
|----------------|--|
| 〈促進要因〉 | |
| 1) 自身の体験 | がんや健康障がいに関する体験 |
| 2) ソーシャルサポート | 人的支援：グループメンバー、がん患者、啓発活動の参加者、 専門職、関係機関、地域連携ステーション 情報提供 経済・移動手段への支援 |
| 3) 病態・予防に関する知識 | がんに関する病態、検診や予防方法等についての知識の蓄積 |
| 〈阻害要因〉 | |
| 1) 病態・要望に関する知識 | がんに関する病態、検診や予防方法等についての知識の不足 |
| 2) 物理的環境 | 過密なカリキュラムによる時間調整の困難 |

会性形成と自己理解】について学んでいた。

看護学生の自主的な取り組みに影響を与えていたとする要因としては、1) がんや健康障がいに関する自身の体験：家族員にがん患者の存在があったり、看護実習やがんサロン訪問で患者・家族の体験談を聞く等や、2) ソーシャルサポート：目標を同じとするグループメンバーの存在や啓発活動の参加者の反応等の人的支援、専門職による知識・技術支援、地域連携ステーションによる情報支援等、3) 病態・予防に関する知識の蓄積が学びを促進する要因として上げられた。学びを阻害する要因としては、1) 病態や予防に関する知識の不足と2) 物理的環境：過密なカリキュラムによる正課外活動の時間調整の困難が挙げられた。

V. 考 察

学生はがんという専門的な知識を必要とする啓発活動を課外で行うことで、【関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性】【専門職者を目指した自己研鑽】【コミュニケーション能力の向上】【問題発見・解決と企画力の向上】【倫理観・責任感を伴った行動の必要性】【社会性形成と自己理解】を学ぶこととなった。以上の結果から、がんの検診啓発活動に取り組む看護学生による正課外活動の教育効果について考える。

正課外活動は、そのほとんどが学生の自主的な活動であり、組織的な取り組みが必要となる。学生達は、メンバー間同士の考えや価値観を意見交換しながら、企画の検討を重ね関係機関との連絡調整を図って、活動の実施とする。また、日頃慣れ親しんでいるキャンパスから地域に一步踏み出し、啓発活動の場で出会う様々な人々への検診の必要性の呼びかけとそれに応えてくれる反応等から〈メンバーシップ・チームワークが必要なこと〉、〈地域・社会との繋がりを意識する〉ことや〈人と人との出会いを大切にす〉等の【関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性】を学んでいたと考えられた。さらに、啓発活動はその後の検診への行動化が重要であり、呼びかけを通しての〈出会いを大切に繋げ〉、活動を〈継続していく〉ことの必要性

を学んでいたといえる。

これらのことから正課外活動によって、組織性としてのネットワークの構築や精神面での成長（達成感、自己肯定感など）が養われる。【社会性形成と自己理解】では、〈みんなで協力すれば、できるという達成感〉も感じていた。自ら組織活動行うことは楽なことではない。とりわけ人間関係において多くの困難に遭遇する（佐藤、2010）。先輩の姿、同学年の友人、後輩、専門的志向を持つ者にとっては専門職者、地域の人々等々と実に多岐に渡る人々との出会いがある。正課の中でこれらの刺激を受けることもあり得るが「聞いた」「見た」だけでは学びや効果は浅く、「係わる」ことによって深まると言える。正課外活動では、多くの人々や様々な価値観などと「係わらざるを得ない」環境となるために培われるものと言えよう。また、このような組織的な活動を通じて人間関係等と格闘することは学生時代だからこそ、貴重なものであると考える。

多くの人々は、検診の必要性は感じていてもなかなか検診を受けるという行動には結びつかない。その理由や背景を理解し、学生達は啓発活動を行うために、説得力のある説明が求められる。そのために【専門職者を目指した自己研鑽】として、〈基礎的な知識と最新の情報収集が必要であること〉〈病態・予防に関する深い理解と継続した学習の必要性〉、また、がんの啓発サポーターの〈がん患者の経験に学び、その経験知を活かすこと〉〈自らも検診を受けて説得力のある説明・指導ができること〉を痛感していたと考える。専門職を目指しながらも、学習途上で未履修科目・内容があるために、病態学や予防検診に関する専門的な知識と技術の習得が必要であることを感じる機会となり、専門職者としての自覚を高める機会ともなるといえる。

また、学生達が相対する対象者のほとんどは、世代や価値観も異なる見ず知らずの人が多く、日頃の友人に話しかけるのとは勝手が異なる。啓発活動の前にはリハーサルを何度も重ね、その実際は緊張と戸惑いの連続であったことが伺える。そのため、〈相手のレディネスに応じた説明が大切であることとその難しさ〉〈相手の

価値観を尊重した説明も大切であること〉などの伝える力について学ぶこととなったといえよう。伝えるという説明だけではなく、相手の反応を確かめたり、〈非言語的コミュニケーションを活用すること〉〈相手の話を聴き、思いを引き出すことが重要であること〉など、【コミュニケーション能力の向上】が求められる場となっていたと考えられた。

昔ながらの講義形式の正課と、自主的活動を行っている正課外活動を比較した場合、正課外活動を通じてこそ培うことのできる力:企画力、行動力、応用力、積極性、社会性があると言われる(佐藤, 2010)。また、コミュニケーション能力、交渉力、企画立案能力、マネジメント能力、リーダーシップ能力が示されてもいる(日瀨, 2009)。本研究でもほぼ同様の結果を認めた。正課外活動は、そのほとんどが自主的活動であることから、企画力、行動力、応用力、積極性、社会性といった能力が培われると考える。正課の場合は、教員主導で学生は受身になりがちである。教員は教育のプロでもあり、教育効果が上がるように企画されたものが提示されるため、学生はそれに従って学んでいけば力がつくことになる。それに対して、正課外活動では、自らが企画して臨むこととなる。多くの学生にとっては、初めての経験でもあり、容易ではないが、人間としてあるいは、社会に出てから必須の能力を習得することができる格好の機会ともなる。正課外活動は自主的活動であることから、企画力、行動力、応用力、積極性、社会性といった教育効果を培う効果的な教育方法であると考えられる。

また、倫理性、社会性を得ることができるのも正課外の特徴である(中森, 2010)。学生はこれまでの「子ども」としての位置にいたが、大学では自立した人間であることが求められる(佐藤, 2010)。地域に出向いて様々な人々との「係わる」機会の中で、学生から社会人としてのマナーやエチケットを備えた対応が求められる、それらを学ぶ機会が、地域での正課外活動でもあると考える。また、がんは死をも連想させ、個人によっては避けて通りたいと思うような繊細な事項であり、啓発サポーターや学生の個人的な経験を交えた啓発活動を行うことか

ら、プライバシーの保護や倫理観の育成能力を培うことに繋がると考える。

次に自主的な学びに影響を与える要因について述べる。学びを促進する要因は、1) がんや健康障がいに関する自身の体験、2) ソーシャルサポート、3) 病態や予防に関する知識の蓄積、阻害する要因は、1) 病態や予防に関する知識の不足、2) 物理的環境: 過密なカリキュラムによる時間調整の困難があった。

近年、子どもの生育基盤となる家庭や地域の教育力の低下、子どもの生活体験の減少などを背景に、情緒不安定な大学生が増加傾向にあり、行動力や対人関係に支援を必要とする(北島, 2012)と言われて久しい。そのためにも促進因子のソーシャルサポートが効果的であり、必須なものではないだろうか。それは必要な時に、学生が必要とする地域や病態・予防検診の最新情報の提供等の後方支援を行いながら、学生の力を信じ、引き出す関わりとして意味を持つといえよう。さらに専門志向の看護学生であることから、またがんという病態に関する知識を必要とすることからも専門職の知識・技術の支援は、学生が自信を持って説明・指導ができるために必須のものである。いつでも求めに応じながら、学生が正課外活動で培った課題発見・解決の能力を活かしていけるように、学習や情報支援をしながら見守ることが重要なことと考える。そして、阻害要因については、学生達で解決できるものそうでないものと区別し、今回のカリキュラム上の課題などのように学生自身では解決に至らないものは、組織的な検討も必要になると思われる。

正課外活動を促進することは、学生の学びと成長を果たすことを目的とする大学の重要な役割である(佐藤, 2010)と言われている。今後は、学生による自主的・集団的取り組みを支援することを基本とし、大学は参加できる仕組みの可視化や条件整備などのデザインをしていくことが重要であると考えられる。同時に自らの学び・成長が認識・評価できる体制づくりも不可欠である。それによって、地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な「社会人基礎力」や「学士力」「人間力」の育成に繋がるものと考えられる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

がん検診啓発活動を行う自主グループに属している一部の学生によるデータであり、また一施設での限られた環境での結果であることから、一般化には限界がある。今後、継続してデータを蓄積していくことが必要である。

また、自主グループ設立に携わったか否か、学年進行や参加度の違いによる個々の学生の学びについても明らかにしていくことが課題である。

VII. 結 論

地域の健康課題「がん」に関する、啓発活動に取り組む看護学生の学びとそれに影響を与えた要因について検討した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 学生は、関係づくりとしてのネットワーク構築の重要性、専門職者を目指した自己研鑽、コミュニケーション能力の向上、問題発見・解決と企画力の向上、倫理観・責任感を伴った行動の必要性、社会性形成と自己理解の6カテゴリー、30サブカテゴリーについて学んでいた。
- 2) 看護学生の学びに影響を与えている要因は、(1)がんや健康障がいに関する自身の体験や、(2)ソーシャルサポート：人的支援、知識・技術支援、情報支援、(3)病態や予防に関する知識の蓄積が学びを促進する因子として、(1)病態や予防に関する知識の不足と(2)過密なカリキュラムによる時間調整の困難が学びを阻害する因子として上げられた。
- 3) 授業時間以外の自主的な学習を促進する正課外活動の重要性が示唆された。

文 献

- 日潟淳子, 森竜平, 小山田祐太, 他 (2009) : 正課外活動によって得られる能力尺度の開発, 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要, 2 (2), 129-134.
- 平野文子, 伊藤智子, 高橋恵美子, 他 (2011) : 自主グループの活動と連携した地域を基盤とする看護教育の成果と課題, 島根県立大学短期大学部研究紀要, 5, 189-199.
- 経済産業省 (2006) : 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」
- 北島洋子, 細田泰子, 星和美 (2012) : 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係, 日本看護学教育学会誌, 22 (1), 1-12.
- 厚生労働省 (2009) : 平成 19 年度地域保健・老人保健事業報告の概況, 2012-8-30, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/c-hoken/07/index.html>
- 溝上真一, 中間玲子, 山田剛史 (2009) : 学習タイプ (授業・授業外学習) による知識・技能の獲得差違, 大学教育学会誌, 31 (1), 112-119.
- 文部科学省 (2008) : 中央教教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」
- 中森康之 (2010) : 逆説の教育～「現場」が育てる「人間力」あるいはキャリア教育～, 平成 22 年度高等教育講演論文集, 1-4.
- 佐藤敬二 (2010) : 正課外活動を通じた学生の成長, 立命館大学 SUMMER ISSUE, 28-29.
- 島根県 (2008) : 島根県がん対策推進計画
島根県 (2010) : 平成 22 年度第 2 回島根県がん対策推協議会 活動事例報告 (資料 3)
- 友野伸一郎 (2010) : 対決! 大学の教育力, 朝日新書, 東京.
- 山田剛史, 森朋子 (2010) : 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割, 日本教育工学会論文誌, 34 (1), 13-21.

Nursing Student's Learning through the Cancer Screening Enlightenment Activity

Fumiko HIRANO, Tomoko Omura, Yukiko KOIKE,
Reiko KANO and Kazuya YAMASHITA

Key Words and Phrases : Cancer, Cancer screening enlightenment activity, Activity Regular curriculum outside, Nursing student